

パリの「法制史」通り

名古屋大学大学院法学研究科教授 石井 三記

パリを歩くときは、下をよく見ないと……と注意されるにもかかわらず、通りの名前をしるした青いプレートに、つい目が行ってしまふ。やはり、お目当ては歴史や法制に関連してくる通りになる。歴史研究の領域で「記憶の場」が議論されているが、まさに街路等の名称はこの格好の素材をあたえてくれよう。たとえば、2015年1月はじめにパリで起こった風刺新聞社への襲撃にたいし、パリで大規模なデモ行進がおこなわれたが、それは「共和国(レピュブリック)広場」を起点にして「国民(ナシオン)広場」をゴールにしたものだった。そのふたつをつなぐのが「ヴォルテール大通り」であることの意味は、かれが18世紀のプロテスタントの冤罪事件や宗教的不敬で斬首刑にされた事件に立ち上がって世論に訴えた人物だからであり、パリの書店では、ヴォルテールの『寛容論』(邦訳は中公文庫ほか)が2ユーロで平積みになされて販売されていた。

といいながら、デカルトのお国柄というべきか、パリの区に名前はなく、番号が1区から20区まで割り振られ、セヌ川の中の島のシテ島を中心にかたつむり状にひろがっている。その14区には「ボワソナード通り」がある。ただし、写真の生没年で推測できるように、明治政府のお雇い外国人として招聘された、日本近代法の父というべきボワソナードその人ではなく、かれの父親ということになる。こちらのボワソナードは、古代ギリシャ学の泰斗でコレージュ・ド・フランス教授、ちくま文庫の『万国奇人博覧館』によれば相当な人間嫌いだったようで、同僚が訪問したときに本人自身が当人不在と答えたとの逸話が紹介されている。



フランス法制史に関連するものとしては、革命前の司法官たちやドマなどの法学者、モンテスキューなど啓蒙思想家、フランス民法典の起草委員のボルタリス、トロンシェ、マルヴィル(残念ながら四人目のビゴ・ド・ブレアムヌはパリにはなく、出身地のレンヌにその通りがある)、19世紀の法学者としてはボワソナードの恩師のひとりであるパリ大学法学部教授のオルトラン、などの名前の通りがある。ところで、フランス革命期に国王が議会で裁判され、処刑されたが、その際に三人の弁護人が付されていた。その三名とは、上記の民法典起草委員となるパリ弁護士会長トロンシェ、革命前に百科全書出版に尽力した開明的な司法官マルゼルブ(シテ島の裁判所のコンコースにそのレリーフがある)、そしてのちに破棄院長官になるド・セーズである。国王ルイ16世が処刑されたのは現在のコンコルド広場(当時は革命広場)、遺体は広場からロワイヤル通りを経たすぐの墓地にいったん埋葬される。そこが現在のマドレーヌ寺院で、そこから延びる通りの名前の三つに、この国王弁護人の名前が付けられているのである。